

栢木県現代俳句協会報

No. 171



第一七一号

発行所

〒三三七〇三二五

佐野市吉水駅前一五八 水口方

栢木県現代俳句協会

発行人
編集人
中井 洋子
松本 登子

令和五年十月一日発行

第68回俳句研究会

令和五年九月三日(日)
宇都宮市中央生涯学習センター

「俳句研究会」になった？

中 村 國 司

「第六十八回俳句研究会」が令和五年九月三日に宇都宮市中央生涯学習センターで開かれました。担当は宇都宮支部でした。

支部の当日出席は鯉沼桂子、池澤光子、森本金一の三氏に中村を加えた四人。そして速水峰郵さんです。これらの皆さんで七月と八月に準備会議を持ち、九月の本番に臨みました。

仔細は紙数の関係で書けませんが、参加者数の把握、マンパワー不足など、い

くつかの解決すべき課題がありました。支部の皆さんで課題を共有し、解決策を模索しました。おかげで①事前準備をしっかりとる。②先例にとらわれず発想を変えて取り組むetcなど、課題クリアの感触が得られました。実際にそれは達成できたと感じています。

ところで「俳句研究会」というタイトルの重さです。直近の前例に「俳句研究」の要素を探しましたがよくわかりません。そもそも「俳句作り」自体に、対象の本質を



笑顔の集合写真



見抜く、的確な写生で対象に詩情を表現させる e.t.c など、俳句研究の要素が重なるからややこしいのです。

そうこうしているうちに句会タイムが、スタッフのよい手際でプログラムより早く進み、数十分の余裕時間が生まれました。見回せば特別選者席には全国に名の響いた七名の俳人が着座しています。一瞬にして「俳句研究会」になるとひらめきました。講評時間をちよっとプラスさせて頂くだけで何かが生まれる！予感な

のです。

講評を終えて席に戻る前に質問タイムを設けたのです。「皆さんご質問は？」と。会場は「しくん」としています。評者に「何かございませんか？」。するとこのあたりが名だたる俳人。司会の意を酌んでご自分の俳句への思いを熱く、鋭く、そして短く語ってくれました。

司会席から見ていると多くの人がメモを取っています。「嗚呼、俳句研究会になった！」と感じた瞬間でした。

◇特選賞

和田 浩一 選

残暑の教会くらやみにいて安堵 中村克子

中井 洋子 選

析の実はまだ空のもの県庁前 鯉沼桂子

石倉 夏生 選

片蔭に入れば片蔭色の風 山野井朝香

速水 峰邨 選

炎昼を歩き誰のせいでもない怒り 和田璋子

須藤火珠男 選

ふと秋思オライオン通りの二階席 池澤光子

中村 克子 選

教会のミサ曲包む蟬時雨 戸田富美子

水口 圭子 選

片蔭に入れば片蔭色の風

山野井朝香

◇最高点句

析の実はまだ空のもの県庁前

鯉沼桂子

◇その他の作品（順不同）

晩夏晩年縄文土器に炎あ

和田浩一

賛美歌を秋の団扇が広げゆる

中井洋子

城跡の城の幻影雲の峰

石倉夏生

炎天を飲みこんでいる十字の塔

速水峰邨

むかしの少年二荒詣す晩夏光

須藤火珠男

街騒を日傘に閉じてビルに入る

水口圭子

讚美歌の響き残暑の裏通り

北島洋子

土星のみの城址色なき風の中

小川たか子

秋の風巫女のすり足遠のきぬ

五十嵐すず

駅までの緩い坂道風は秋

佐々木輝美

秋風や教会の歌運び来る

江口 悠

秋暑し釜川の水ゆつくりと

森本金一

二荒の階の風秋高し

小杉栄美子

教会の石の蛙の汗ばみぬ

本間睦美

イエスの血秋海棠の色を問ふ

中村國司

蜻蛉舞う古木ヒイラギ城のあと

曾我部美恵子

十五階の展望ロビー秋探す

松本登子

第十八回 通信句会結果 (令和五年度) 令和五年九月三日

※特選賞

和田 浩一 選

助手席の母との時間麦の秋

池澤 光子

中井 洋子 選

万緑や児の眼は宇宙船の窓

小川たか子

石倉 夏生 選

万緑や児の眼は宇宙船の窓

小川たか子

速水 峰郵 選

てにおはの知りたき一字紙魚のあと

五十嵐すず

須藤火珠男 選

逃げ水や自己を肯定しない距離

本間 睦美

中村 克子 選

ジャガイモの土間の発芽は夢心地

高木 洋子

大竹 照子 選

初夏のはばたきそうな石拾う

水口 圭子

水口 圭子 選

夏景色クリックすれば激戦地

石倉 夏生

※最高得点

初夏のはばたきそうな石拾う

水口 圭子

諸家近詠

斎藤 絢子

白龍の鱗落とせり春の空

達観か諦観かまづ生ビール

あの世までランダムウォーク罌粟の花

花野中父の拳骨置いて来し

履き癖に任せて歩く探梅行

齊藤 雅子

湾に沿い光放ちて卯波立つ

卯の花腐し寂聴さんが過る

春蟬の声に凭れてリュック置く

無縁墓なるか轉に埋もれいる

地震多き国に色増す額の花

清水 智子

ふるさとはゆっくり錆びて星月夜

こめかみにゆるき電流冬夕焼

たましいを透かして静か白牡丹

下野を驚づかみして夕立来る

連山に浮力うながす雲の峰

第三十一回色紙展のお知らせ

◇日 時 十一月十一日(土)～十一月十二日(日)

午前九時半集合

◇会 場 とちぎ岩下の新生姜ホール(栃木文化会館)

一階大会議室 (栃木市旭町)

◇会員コーナー 『色紙や短冊』一人二点まで

◇特別コーナー 『和田浩一の俳句世界』

*はがきで一句コーナー

非参加者のために発表の機会を設けております。多数のご参加をお待ちしております。色紙展の参加者もふるってお送りください。

※詳しくは実施要綱を参照

◇お知らせ

第3回役員会

- ・令和5年12月12日(火)
- 11時30分～15時
- ・すぎのや本陣栃木店(栃木市城内町)
- ・昼食後同所にて役員会
- ・詳細は後日葉書にて

第2回役員会

左記の通り開催されました。
7月12日(水)
於・キョクトウとちぎ蔵の街楽習館

※次回172号の原稿締切りは
11月20日です。

◇新入会員紹介

・小川たか子(益子町) 推薦者 中井洋子
落葉ふむやさしき言葉きくやうに
リルケ借る泰山木の図書館に
み空澄み峽澄みこころ澄む予感

・関口 ミツ(栃木市) 推薦者 石倉夏生
諸葛菜人に余命といふ力
滴りのひとつひとつのころざし

生き生きと孤独を回す木の実独樂

・あそうりえ(小山市) 推薦者 中井洋子
父の墓洗ふ聞きたきこと数多
天高し百歳の母紅をさす

ボサノバを尻尾で聞きし猫小春

・竹内律子(小山市) 推薦者 佐怒賀正美
箱庭の椅子に母をり夕日影
鳴き砂を踏み南国の夕陽追ふ

潦に置き忘れたる夏の雲

・白井正枝(栃木市) 推薦者 石倉夏生
水平線いくども押しして平泳ぎ
海面は息するところ天高し

琉球ガラスの気泡は鳴咽慰霊の日